



世に役立つ「発明」 たゆまぬ「改良」 それらを支える「円満」

新田 長次郎 (1857~1936年)



ニッタ 株式会社

本社所在地：大阪市浪速区桜川4-4-26 従業員数：2,161名 資本金：80億6,000万円
創業：1885(明治18)年
事業内容：工業用伝動ベルト、ゴム製品などの製造、販売

「学問のすゝめ」の思想と精神に感銘

創業者の新田長次郎は、1857(安政4)年に現在の愛媛県松山市の農家の次男として生まれた。生家は、当時この地方で自作農の上層の家であり、かつては庄屋をつとめたほどの由緒ある家柄であった。父は、長次郎が5歳の時に病死。母のウタは5人の子供を一人も里子に出すことなく、女手一つで彼らを育てた。

16歳になった長次郎はある日、福沢諭吉の「学問のすゝめ」から、四民平等、独立自尊の精神を学び、大いに啓発を受けた。それは、愛媛の農村の一少年であった長次郎が初めて接した文明の思想であり、後の長次郎の人生にも大きな影響を与えることとなった。

製革との出会いと技術習得の覚悟

1 877(明治10)年、長次郎は20歳の誕生日を期して家郷を離れ、大阪へと出た。大阪で下宿生活をするうち、下宿先の近所で質屋を営む西尾家の希望で、同家が兼業する米屋で働くことになった。

ある日、長次郎は藤田組製革所で技術者指導にあっていたドイツ人製革技師 ハイト・ケンペルの講話を聞くことになった。そこで製革業が将来有望であることを知った長次郎は、洋式製革の技術を習得する決心をし、強い覚悟をもって藤田組製革所に入所。大阪へ出て約半年後のことであった。

製革は話に聞いていた通り、決して楽な仕事ではなかった。長次郎が入所した冬、仕事で扱う石灰で手の皮が破れて出血するほどの体験をした。しかし、辛抱強く技術習得に努め、入所後約2年で、製革技術のおおよそを習得した。

しかし、1880(明治13)年、藤田組製革所は経営難により独身者の職工を解雇することになった。長次郎も退所を余儀なくされ、その後は不本意ながらも職を転々とした。それから2年がたった1882(明治15)年、大倉組製革所の職長次席が長次郎のもとを訪れ、長次郎に入所を懇願するということがあった。背景には、洋式製革法の熟練者が不足していたことがあり、この職長次席は製革知識に富んだ長次郎を捜していたのだ。長次郎はこの年の10月に大倉組製革所に入り、再び製革の仕事に励むことになった。

「円満」を重んじ、独立を決意

大倉組製革所に入ってから1年半ほどで、長次郎は工場の仕込部主任に任命された。これはなめしの準備工程一切を指揮する地位であった。

しかし、この時長次郎はすでに独立を決意していた。きっかけとなったのは、専務が技術顧問を排斥したことであった。良い仕事環境、良い人間関係なくしては、良い発明、良い改良はできないと、「円満」を重んじていた長次郎にとって、人間関係の悪化は耐えられなかったのである。

大倉組製革所に入所し、しばらくして結婚していた長次郎は、妻・ツルに独立の意思を伝えると、その話はツルの兄である井上利三郎に伝わることになった。利三郎は製革業に興味を持ち、長次郎に「独立を支援したい」と申し出た。これが契機となり、長次郎は現在の浪速区に、作業のための一軒家を借り、製革に向けての準備を始められることになった。

1885(明治18)年3月18日、原料の皮の水卸し(※塩蔵または乾燥された原皮を水に浸け、塩抜き洗いをする)が行われたこの日が、現・ニッタ株の創立記念日とされている。

商売の恩人・吉比為之助

創業当初、製造していたのは製靴向きの薄物油革であった。独立当時は、日曜・祝日も休むことなく昼夜にわたり仕事に専念し、その努力が報われたのか、創業の年の暮れには、少しでもあったが利益をあげることができた。その後、1887(明治20)年には、長次郎の他に3名が出資して、4人で匿名組合「新田組」を作った。出資者の一人、革製品問屋を営む吉比為之助は、長次郎にとって忘れられない恩人だった。

それは創業の翌年のことである。ある問屋が製品を納めさせておいて、代金を支払わないという事態が起こった。そればかりか『金に困るなら、長次郎を工場主任にするから、工場を自分の名義にしろ。そうすれば融資しよう』と言いだした。長次郎は創業まもない身であったため、資金の余裕がなく、原皮を仕入れることができなくなってしまった。困った長次郎が吉比為之助を訪ねると、吉比は長次郎に同情し、その問屋から製品を引き取り、全品買い上げて窮状を救ってくれた。この一件から、製品は主に吉比商店を通じて販売されるようになった。

国産第1号の動力伝動用革ベルト

ある日、厚物の牛皮25枚を仕入れたものの、買い手がつかないため処分に困っていた者が、長次郎の技量と製品の評判を聞きつけて訪ねてきた。厚物皮は薄物よりも安く、かねてから工業用革製品を作りたいと考えていた長次郎は、その厚物皮をすべて引き取ることにした。

その厚物皮を加工し、品評会に出品したところ、2等賞を受賞した。



創業当時の工場の様子

2等賞に輝いた長次郎の厚物は、大阪紡績(株)(現・東洋紡(株))の技師と重役の目に留まり、品評会からまもなくしてベルトの試作を依頼されることになった。当時、大阪紡績は順調に事業を拡大していたが、すべての機械が輸入品だったため、革ベルト等の機械部品や付属品の補充に困っていたのである。

こうして、動力伝動用革ベルトの国産第1号が誕生した。

長次郎が試作依頼を受けたベルトの試験は、大阪紡績にて行われた。当時はベルト製作に適した接合糊がなかったため、接手は糸で縫合したものであった。国産の生地を使った初めての試みにも関わらず、試験の結果は極めて良好だった。

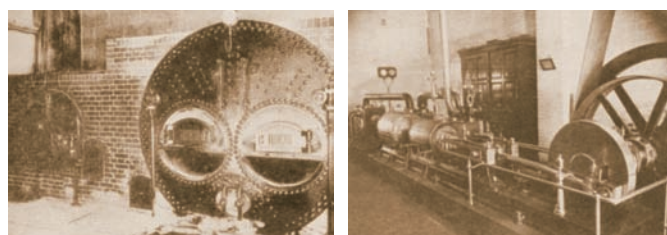
大阪紡績の首脳部は、この厚さだともっと幅広のベルトができるだろうと考え、さらに幅を広く、長いベルトの製造を長次郎に依頼した。実用化に成功した国産第1号の革ベルトは、動力伝動用としての用途を広げ、発注を続々受けるようになった。

明治20年代に入ると、紡績勃興ブームが起こり、全国各地に紡績会社の設立が相次いだ。これらの工場のはほとんどは、大阪紡績をモデルにしたものだった。長次郎の作った本格的な動力伝動用ベルトは、権威ある大阪紡績によって、その品質を認められたということもあり、次第に紡績関係企業の間で知名度を高めていった。



長次郎の
動力用伝動ベルト
(ブランド名：
新田ベルト)

日本の産業革命の核となった紡績業からの受注に成功。工業用ベルトとして日本の産業界に大きな貢献を果たすこととなった。



海外視察の成果－蒸気機関による動力革命

1893(明治26)年のシカゴ世界博覧会への出展を皮切りに、イギリス・フランスの製革所を視察した長次郎は、帰国すると修得した知識で工場の改善を進めた。蒸気エンジン(写真右)とボイラーの(写真左)の導入もこの時で、同社の生産性は格段に向上していった。

産業界で確固たる地位を築いた 新型ベルトの開発

ベルト製造に取り組んだ当初、長次郎がもっとも苦心したのは接手の問題であった。大阪紡績から依頼された最初のベルトは糸での縫合だったが、その後、革で縫う方法を採用した。さらに接合糊の研究を続け、アイシングラス（魚の浮袋から作ったゼラチン）でローラー革を接着していた紡績会社から、それを見本にもらい、研究・改良を重ねた結果、3年間を保証し得る製品を作るまでになった。

1904(明治37)年には、接手を表面部三分、裏面部七分に割って挿接する製法によって、最初の特許許可を得た。この挿接法によって、かなり耐久力に優れた製品ができるようになった。

この挿接法は後に、2枚合わせ、3枚合わせの厚手の革ベルトが製造されるようになって、その効力を大いに発揮、昭和40年代の最後の厚手ベルトに至るまで、厚手ベルト用接合法として活用された。

長次郎の発明・改良により、(株)新田帯革製造所(現・ニッタ株)は品質、技術の評価と信用によって当時の産業界に確固たる地位を築いていった。

教育を通じて社会に貢献

成長した5人の息子たちが事業に加わり、タンニン製造からゴムベルト、膠・ゼラチンの製造と事業が拡張を続ける中、長次郎は当時の難波警察署長から、つぎのような相談を受けた。「貧困のために小学校にも行けずに働いて家計を助けている少年少女が、難波署の管内にたくさんいる。こうした少年少女のために、学問の場をつくれぬものか。」

少年時代、「学問のすゝめ」に大きく感銘を受けた長次郎には、技術と事業だけでなく、教育を通じて社会に貢献したいという思いがあった。

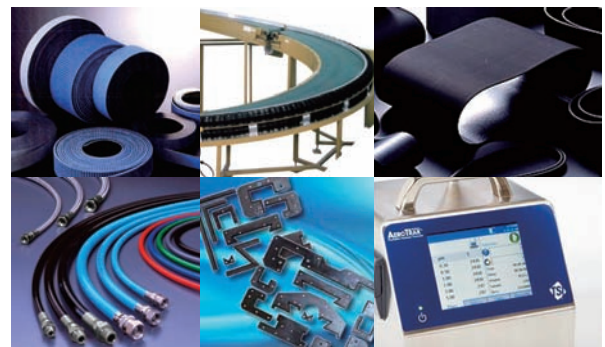
署長の提案に賛同した長次郎は、1911(明治44)年、現在の浪速区に3軒の家を借りて私立夜学校をつくった。学校経営の一切の経費を負担したのはもちろんのこと、生徒の学用品、衣服、履物まで支給した。また、1923(大正12)年には、故郷の松山に松山高等商業学校を創立した。同校は財団法人として設立され、長次郎は創立費と経営費を出資した。その後、1949(昭和24)年に大学に昇格して、松山商科大学(現・松山大学)となっている。

発明・改良・円満の志を後世に

長次郎には従業員に繰り返し説いていた言葉があった。それは「発明・改良・円満」が事業を育てる母だということである。工業の発展こそ日本の生命線だと考えていた長次郎は、「日本にないものを我が手で作り上げる」、「全員による数限りなく考えられる改善こそが大切」と考え、「発明」と「改良」を生涯探求し続けた。そして、その両輪を支えるためには、良い仕事環境や人間関係を重んじる「円満」の考え方が必要だと考えていた。

1936(昭和11)年、数々の発明により開国当時の日本の工業界を盛り立ててきた新田長次郎は80歳で逝去したが、その思想は現在のニッタ株にも強く受け継がれている。代表取締役社長・新田元庸(14代)のもと、同社は「オープン&フェア」の精神をベースに、敬称の廃止(すべての社員がお互いを“さん”付けて呼び合う)や、月1回の社長と若手社員のランチミーティングなど、積極的に人材交流を行っている。

篤実な人柄をもった技術者として、また、未来を担う子供達のことを想う教育者としての長次郎の志は、今なおニッタ株の次なる100年の基礎として輝き続けている。



ニッタ株の製品

搬送用ベルトからモニタリングシステム製品まで、幅広く製造している。



新田長次郎資料展示室

創業者である新田長次郎の遺訓・遺徳、業績や社会貢献活動などを後世に伝えるべく、長次郎に関する史料(年譜、海外視察、交友関係など)のパネルや愛用の品、扁額などが展示されている。(ならやま研修所内)